別記様式第6

# 論 文 審 査 の 要 旨
(Summary of Dissertation Evaluation)

| | | | |
|---|---|---|---|
| 博士の専攻分野の名称 (Major Field of Ph.D.) | 博士（　教 育 学　）Ph.D. | 氏 名 (Candidate Name) | 渡 辺　朗 生 |
| 学位授与の要件 | 学位規則第４条第[1]・２項該当 | | |

論　文　題　目 (Title of Dissertation)
青年期における未来の家庭展望とライフキャリアの形成

論文審査担当者 (The Dissertation Committee)

| | | |
|---|---|---|
| 主　　査 (Name of the Committee Chair) | 教　授 | 今川　眞治 |
| 審 査 委 員 (Name of the Committee Member) | 教　授 | 鈴木　明子 |
| 審 査 委 員 (Name of the Committee Member) | 准教授 | 中島　健一郎 |

〔論文審査の要旨〕 (Summary of the Dissertation Evaluation)

本論文は，青年の未来の家庭展望を測定するための尺度を開発し，青年がもつ未来の家庭展望の実態と類型を明らかにするとともに，青年の未来の家庭展望に関連する要因として，家族観や生活観，これまでの生活環境に焦点を当てて明らかにすることを目的としたものである。さらに，大学のキャリア教育の授業において未来の家庭生活について考える活動を実践することによる未来の家庭展望の変化について検討したうえで，青年の未来の家庭展望の発達を軸としたライフキャリア教育の可能性を追究することも目的とした。論文の構成は，次のとおりである。

序章では，職業キャリアという意味合いが強かった従来のキャリア概念に換わって，1990 年代に始まったライフキャリア理論の概念の整理と検討を行うとともに，青年が時間的展望を形成することの重要性を説く先行研究から示唆を得て，青年期における未来の家庭展望の実態を捉え，その構造を明らかにすることができる尺度開発の必要性を述べた。

第１章では，大学生を対象とした調査をとおして，「見通しの明確性」，「希望・自信」，「指向性」，「渇望」，「将来に向けた準備」の５因子からなる「未来の家庭展望尺度」を開発し，完成した尺度の信頼性と妥当性を検証した。また，本調査をとおして，青年の未来の家庭展望が，「見通しの明確性」，「指向性」，「将来に向けた準備」から成る認知的側面と，「希望・自信」と「渇望」から成る感情的側面から構成されることを明らかにした。さらにクラスター分析を行うことで，青年の家庭展望の有り様を「低関心群」，「渇望群」，「楽観群」，「高関心群」の四つのタイプに分類した。

第２章では，青年の未来の家庭展望の実態と，家族観や生活観，及びこれまでの生活環境との関連を検討した。その結果，青年が多様な家族観及び生活観をもつことによって，未来の家庭展望の認知的側面の獲得と発達が促されることが示唆された一方で，感情的側面の発達は，個々人が持つ家族観や生活観に大きな影響を受けないことが示された。また，定位家族の構成や居住形態は未来の家庭展望と関連しないことが明らかになった一方で，親との関係及びこれまでの生活経験が，青年の未来の家庭展望の認知的側面と関連することが示された。

第３章では，大学生を対象に，未来の家庭展望の発達を促すライフキャリア教育を実践し，当該授業の受講が，未来の家庭展望に肯定的変化を及ぼすかについて検証することを試みた。その結果，本科目の受講は大学生の未来の家庭展望に概ね肯定的な変化をもたらすことが検証された一方で，学生の未来の家庭展望タイプによって，教育的効果に違いがみられることが示唆された。教育的効果の違いから，特に，未来の家庭展望について現時点で真剣に向き合っていない低関心群の学生に対して，将来の仕事や家庭生活に関する目標をもつことができるような授業カリキュラムを開発することの必要性が示された。

終章では，本研究の総括として，ライフキャリア教育の実施にあたって，職業展望との関連を図りながら未来の家庭展望の発達を促すことと，未来の家庭展望の発達を認知的側面と感情的側面の二つの側面からとらえることが必要であること，そして未来の家庭展望の類型に即して，最適な教育方法や学習内容を実施することが重要であることを述べるとともに，家庭展望研究の課題とこれからの展望を示した。

本論文は，次の３点で高く評価できる。

１．青年の未来の家庭展望尺度を開発し，その信頼性と妥当性の検証を行ったこと。
緻密な研究計画に基づいて，予備調査から本調査まで明確な方向性を持ってデータ収集を行うとともに，理論に基づいた統計的手法に則って結果を分析し，開発した尺度の信頼性と妥当性を検証したことで，本尺度を用いたライフキャリア研究の発展が期待できる。

２．未来の家庭展望尺度を用いることで，大学生の家庭展望タイプを分類できることを実証したこと。
これまで明らかにされてこなかった青年の家庭展望の実態を明らかにするとともに，青年の未来の家庭展望を認知的側面と感情的側面の二つの側面から捉え，家庭展望をタイプ分類できることを示した。

３．大学のキャリア教育に未来の家庭展望尺度を利用することをとおして，大学生の家庭展望に肯定的変化を促す可能性を見出したこと。
高等教育のみでなく，中等教育や社会教育において，未来の家庭展望やライフキャリアの概念を浸透させ，本尺度を利用することをとおして，青年期から成人期，老年期に至るまでの各世代にわたるライフキャリア形成に資する可能性を示した。

以上，審査の結果，本論文の著者は博士（教育学）の学位を授与される十分な資格があるものと認められる。

令和　６年　２月　９日

備考　要旨は，A4版2枚（1,500字程度）以内とする。
(Note: The summary of the Dissertation should not exceed A4 size,2pages (about 500 words).)